使命は重し

建國三千年
常に國難を叫んで今日の興隆を見る

×

呉服の丸柏
創舗三十年
常に店難を唱へて今日の盛大を見る

×

萬朶を誇る
櫻花　榮光のかげに
貴き血涙の犧牲　幾許ぞ

×

時や　春!!!

朗かに　なごやかに
繚爛　百花の默示を聽く

×

「丸柏の展望」第一篇、店史四十八年の素描を結ぶに當り、ゆくて.遠く吾等が使命の重且大なるを想ひ、只拜みたい心になる。

霞烟萬里の彼方、理想の嶺は模糊として遙けく天表に連なるを見る。

店祖逝いて八年、諸勢漸く緒につかんとするに際し卒如又、店母を亡ふ。

戒心せよとにあらざるか、奮起せよとにあらざるか。

然れども幸にして吾等には壯き現店主を戴き、優しき新店母を仰ぎ得るの光明を持つ——

あゝ全員、眞に協心敬愛の實を擧げざるべからず。

現在聞くが如き幾多の缺陷を包藏せるは事實である、只その缺陷に鋭き反省を

使命は重し

照し、前進向上の一路を勇往すべきは吾等の責務である。
未熟なるが故に、缺點あるが故に、洋々たる前途を有す。
吾等に團結の力だにあらば、協信の誠だにあらば、百萬の敵又怖るゝに足らざるべし。
使命や重し！
千丈の堤も蟻の一穴に崩るゝの諺あり、遠くは古聖の道、近くは店祖の遺訓こそ、使命遂行の鍵である。
靜かに建業四十八年の店史を懷ふ。
亂麻を斷ち、岨坂を攀じて開拓せる店祖の偉績を心眼で洞察したい。
大局に生きて、脚下を照顧せよ。
あゝ、眞に吾等の使命や重し。

店史畧表

慶應3	十月六日店祖生誕
明治6	八月二十四日初代店母生誕
21	店祖商賣開始（二十二歳ノトキ）
22	店祖初メテ下若、行商開始（二十三歳ノトキ）（コノ年憲法發布サル）
23	若松ヲ中心トシ、小石、脇ノ浦、脇田、二島、島郷一圓及戸畑、折尾方面マデ行商
	店祖結婚（店祖二十四歳、店母十八歳）（國會開設ノ年）
24	若松村ヲ若松町ト改制サル
27	五月二十四日、長男茂、生誕（新店主）（日清開戰ノ年）
29	手織木綿ノ自家製造ヲ初ム
30	コノ頃、地盤漸ク成ル
34	十一月十二日、次男濱、生誕
35	（日英同盟締結ノ年）

37		（日露開戰ノ年）
40	開店ノ機運熟ス	
42	四月一日新店主下若參加（十六歳ノトキ）	
43	八月五日、目出度ク開店ス、㋕柏原太物店ト稱シ、太物專業（店祖四十四歳、現店主十七歳ノトキ）	
大正元	八月二十日、田頭槌市入店	（明治大帝崩御ノ年）
2	十月十日、宮地万吉入店	
3	四月一日市制施行	（世界大戰始マル、日獨開戰ノ年）
4		（大正天皇御卽位ノ年）
5	四月十日、柏原濵入店	
6	二月二十四日店祖ノ母上死去、初代店母初メテ下若	
	三月二十七日、村上幸土入店	

7	現店主婚姻	（米騷動勃發ノ年）
8	五月十五日、大石岩義入店	（財界最好調ノ峠）
9	年明ケト共ニ財界大變動、織物大暴落、九月二十日午前一時三内町三中央ヨリ出火、同二時店舗類燒、弓場氏宅ヘ避難ス、九月二十九日東新町ヘ移轉假住、十月十日三内町三、バラック新築ノ假營業所ヘ移轉、十五日ヨリ燒殘品賣出シ	
10	三月九日、中川通ニ分店開設、八月一日閉鎖 三月三十日、柏原一夫入店、九月十二日男店員一名入店	
11	六月十五日、新築ノ店舗ヘ復歸移轉ス、柏原呉服店ト改稱、假營業所ハ綿倉庫トシテ使用七月三日ヨリ四日間移轉賣出シヲナス、懸賣全廢ヲ斷行、絹布類ニ力ヲ注グ、太物ヨリ呉服ヘ轉ズ	
12	三月三十一日、松浦佼入店 七月一日ヨリ開店十五周年紀念賣出シ擧行	
13	五月九日、男店員一名入店、八月三十一日男店員一名入店 豫備品置場トシテ眞鍋氏ノ家二戸分ヲ借ル	
14	三月二十九日、宮地正槌外二名入店 秋呉服商組合脫退ス	

昭和元	眞鍋氏土地購入交渉開始、七月七日男店員二名退店、八月三十一日、男店員一名入店
2	三月三十一日、茨木坦入店、六月十三日、眞鍋氏ヨリ新店舗用土地及建物購入、七月二十五日嫡孫肇死去、十月二十日、倉庫用土地、宮野氏ヨリ購入、十月二十日、夏以來改築中ノ新店舗竣成、十月二十九日、茨木重太郎入店、コノ頃新築中ノ倉庫落成、十二月移轉紀念賣出シ開催、十一月二十八日ヨリ三日間六日午前五時店祖長逝ス、享年六十一、同七日告別假葬、九日本葬ハ郷里ニテ
3	二月二日松浦喜代三入店、三月六日、村上俊三入店、四月十一日、男店員一名入店、六月十七日宮地武入店、七月一日、女店員一名入店、七月二十四日、男店員一名退店、十一月二十五日男店員一名退店、八月柏苑會生ル 九月一日、柏苑第一卷第一號發行（御大典ノ年）
4	一月一日ヨリ、マークヲ㊙ト改ム 四月八日、松浦清六、小林武三、井川竹市入店、五月八日、村上實春入店、八月十四日男店員一名退店
5	四月十五日宮地實入店、四月三十日、村上金三入店 夏、呉服商組合ニ復歸加盟ス
6	三月十七日、男店員一名退店 三月三十日、大出忠義、大出德二、外二名入店、十二月十五日、女店員三名入店
7	三月三日、女店員一名入店、三月三十一日、松浦績、小林幹夫、宮地稔雄入店、三月二

昭和7	十日男店員一名退店五月二十二日午前三時倉庫類燒ス、七月十九日別館用地トシテ宮野氏ヨリ隣接土地購入、七月二十九日、宮地竹松入店、別館建築着工、十二月一日女店員一名入店八月十四日男店員三名退店、一月二十九日女店員一名退店
8	四月十一日、宮地平次、松浦治男、柏原孝造入店、四月二十日、別館新築竣成、五月二十日、洋裁女員一名入店、五月ヨリ雜貨部及、洋裁部新設、五月二十四日、裁斷部員一名入店、六月二十一日洋裁部員二名入店、七月八日、洋裁部員三名、七月十三日、同一名入店十月十六日、女店員二名入店、同十九日女店員三名入店
9	一月一日組織ヲ合名會社トス 四月一日桑原孝、宮地正夫、古川千里入店、四月十四日男店員一名退店、三月二十六日女店員一名入店、四月二十六日同三名入店、五月九日同一名入店五月二十三日同一名入店、七月四日同一名退店、七月十日同二名入店、八月五日洋裁部一名入店、八月二十九日女店員一名退店、十月三日同五名入店、十月十五日男店員一名入店、十一月一日女店員三名退店十二月三十一日洋裁部員一名退店
10	一月十二日午前二時老店母郷里ニ於テ永眠サル、享年六十三、十四日葬儀 一月十日女店員二名退店、一月二十日女店員二名入店、三月二日同一名入店 四月二日女店員二名入店

第二篇、耀やく現全容の鳥瞰

——(昭和十、四、現在)——

店勢の概況

——昭和十年四月現在——

翠滴る高塔の峯を背影とし、前に波靜かなる洞海灣を望む——織りなす船舶の出入繁く、筑豊の原野を縫ふ炭車の集散地——轟々の音、賑々の響き。

耀やく現全容の鳥瞰

それは、みなと若松市を誇る殷盛のシンボルである。

この地の中心街——繁華に輝く處、中川通の一角に、古き信用と。新しき經營方針を高く翳して、堂々——北筑の服飾界に臨出し、生彩陸離。旭日の伸展をなしつゝある呉服の殿堂——

これぞ吾等が本陣——資本金十八萬圓、合名會社、柏原呉服店の現全容である

×

販圖は、若松市を主體とし、對岸戸畑市に確固たる地磐を持ち、遠賀一帶と八幡、小倉の一部、遠く直方地方まで進出するの盛況を示し、目覺しき戰績を收めてゐる。

今や、活動總員男女七十有余名、青壯の現店主を中心に、店祖の遺鉢を護り、相愛互助、敬信協力、以て日夜懸命の努力を續けつゝ邁進の途上にある——

而して、吾等の丸柏は單なる營利を目的とせず、純正なる使命に立脚し、商道

の本義に卽應し、社會必須の奉仕機關としての理想に生くるが故に、所謂商賣の軌道を執らず、斷乎獨自の境地を往く——

徹して、この祕鍵を握れるもの、淸朗にして欣快である。

×

木造總二階の現店舗は昭和二年十月、新築竣成せるもの、爾來、數度の擴張、改造に依つて內部は最大限の活用を余儀なくせられ、狹隘その極に達するの實狀である。

外觀は未だ舊態の域を脫せず、地方都市の環境に順應した、キモノの店——殊に履物をぬぎ、買物をして頂くべく、階上、階下ともに疊敷總陳列式と云ふ特殊形態の販賣方法を採用し、獨步の氣を吐いてゐる。

中川通側八間、三內町側十間、目貫街の中心に位し、若松市服飾流行の源泉をなすと共に配給奉仕の前線に立つ——

店勢の概況

昭和八年四月、三内町側店舗に近接し、本店舗と同面積の別館新築成り、異彩を放つてゐる、外容は幾分の現代味を備へ、躍進丸柏の一面を象徴して明朗——清楚である。

而し、この店が持つ最大の誇りは、建築にあらず、設備にあらず——全員の誠實と、商品の充實にある。

一歩店内に入れば瞭然たる如く、優良、正廉、大量の三大事實は遺憾なく發揮され、他の追隨を許さぬ底の自惚れをもつ——

只、接客サービスの點に於ては萬全を期しつゝありと信ずれども、眞否は大方の叱正に俟つの外はないであらう——

時代の要求に伴ひ、昭和八年春期より、雜貨部を新設し、勢ひ附隨關係にある洋裁部の特設を見るに至り、新生面開拓の意氣愈々擧がる——

仕入は京阪、產地、第一流の會社、問屋と密接なる提携を計り、所謂、仕入ブ

ロックの結成を見、高級京呉服から、關東織物、洋反、雜貨、綿反に至るまで、絶對優良品主義を一貫し、斯界の驚異として注視の的である。

常備商品……萬圓、年賣上……萬圓、共に呉服小賣業界異數出色の部に屬すると聞く——。

しかも其悉くが現金仕入、現金販賣の成果なるを思ふとき、偉なる力の加護と店祖の余惠とを信じ、ひれ伏さざるを得ない——

以上は現店勢の概況である。

店舗の參觀

——昭和十年四月現在——

——春である。

三月になつたばかりの或日——

暖い陽ざしに、中川通のアスファルトをわたる風も和んで、足音も輕く賑やかである。

三十五年の春に躍る、セルの流線調代表作品を着附けした京人形が、右角のショーウインドに登場して人目を引いてゐる。

——左側のウインドには帶地の珍柄がわが世の春を謳歌して、婦人と見ればチヤームせずにはおかない——流石に呉服の丸柏である。

朝——

と、云つても、はや十時が近い。

「今回はお忙しい中をお手間とりましてすみません……」

「……どういたしまして——ようこそ、おいで下すつて、何よりでした、今日は好都合に急用もありませんから、ゆつくり店を御案内致しませう……」

「おかげで、大變參考になりさうです——」

「……參觀など丶大袈裟ですが、一通り御覽に入れて説明さして頂きますと、郷里への土産話にもなりませうから——」

「……かね〳〵噂だけは聞いて居りましたが、想像以上の實際に、まづ驚きましたね——」

「——そんなに云はれますと、お恥しい次第ですが現在の店員の家郷の人達でさへ、まだ認識不足の狀態ですからね——こんな機會にあなた方から郷里の方々へ、愛兒の活躍狀況をお知らせ願ひたいものです——」

「——承知致しました、充分宣傳に努めませう……ハ、ハ、ハ——」

「……いや郷里への宣傳費は計上してゐませんから、そこの處は御承知の上で

——ハ、ハ、ハ……」

二人とも、いと朗かである。

客は九州旅行の途路、昨夜偶然來訪の同郷人——村の有志、A氏である。

昨夜は堺町にある店主宅に泊られた——

應接係は店の古參、Mである。

「——あのショーウインドの配列や、バックなど、門外漢でわかりませんが、とてもよく出來てゐる樣ですね——あれは、どなたの擔當ですか……」

「——おほめに預つて汗顏ですが、あれは店の中でも、年少二十才までの者達の創作です、御覽の通り、八間の間口に約二間のショーウインドが二つ——大きいだけ見晴れもしますが、陳列係もなか〳〵の苦心です」

中川通に佇んで對話は續く——

「それでは、これから店内を一巡、御案内致しませう——」

A氏は微笑をたゝへて歩を店内に運ぶのであつた、Mは店頭右側の足袋部を指して、

「足袋でも馬鹿にされませんね、私共の店だけで、年間×萬足から賣れるんですよ——」

「——ほう——そうですか——」

A氏の聲は、驚嘆的であつた。

「どうぞ履物をお脱ぎ下さい——」

係の少年店員は丁寧に會釋してMの命ずるまゝに扱つた。

「この販賣場の舊式さには、一寸驚かれたでせうね——座賣式陳列販賣と云ふ暫定的新案ものなんです、ハ、ハ、ハ——」

「私——とても落付きがあつてよいと思ひます、それにこの行屆いた設備と配置、商品の豊富さには驚かずには居られませんね」

感嘆はA氏のお世辭とのみは思へない。

「先づ——こちらから見て頂きませう——」

角のウインド裏側にあたる洋反廣巾部の處で、ネル、無地モスリン、色不二絹新モス、天竺木綿等について一寸説明が加へられた。

次は服地部——三内町の奥つき當りである。

「今の處婦人、子供服地のみですが、なかなかよく賣れます、和服の領域まで侵蝕して、洋服化の前途多望ですね——」

「この部の資本だけでも大したものでせうね——そして、この生地は店で仕立される譯ですか——」

「はい——裁斷だけの依頼はすべて茲で無料奉仕して居ります、仕立の方は別館の洋裁部に廻します——」

A氏は物珍らしさうに裁斷の實演に見入る——買物客は各部に入亂れて忙しい

店員のサービス振りに、春らしい情景である。

やがて、新設日淺きにも拘はらず階下面積の右半を領し、すばらしい發展を示せる獨立部門雜貨部——を紹介する。

男子用品としての、シャツ類、ネクタイ、カラー、靴下、等々々——

婦人子供用品としては、毛織製品、毛糸製品、綿製品の各部と、實用洋雜貨の全般に亙り、A氏の觀察眼は微に入り細に及ぶ。

そして悉く——「……ほう——」の連發である。

次は、廣巾友仙部——雜貨に隣接して、華やかな存在であり、階下の中央に蟠居する、

モスリン友仙と、不二絹友仙、廣巾錦紗友仙の地質を比較してA氏の興は盡きない。

次は、モスリン着尺部——友仙部の奥一角を占め、時代の寵兒——銘仙と對峙

して、大衆商品の花形である、A氏はその大量に一驚し、Mの解説に傾聽する——次に年間を通じて、階下の主力であり、王座とも云ふべき、銘仙部を觀る、常備量×千反と聞いて、A氏は「アッ！——」と奇聲を發した程である、この部は階下の左側に面し、廣汎にわたる販積に陣取つてゐる。

最後に、セル部——へ歩を運ぶ、春秋二期に限られた商品であるだけ積極販賣を要するとか、春だけの扱ひ數×千反とか、Mの案内も、懇切を極めてゐる。

まだ見落してゐる、綿反部もあれど、割愛して只、夏の浴衣地が×萬×千反位の販賣力を有するとのみ申添へた——

「——ではこれから、階上の方へ御案内致します——どうぞこちらへ——」

Mは先に立つて左側ウインドの背面にある階段を登る。

上り詰めた處に大鏡があり、自分の影像に二人ともニッコリとした。

どこの店でも、階下を主體とし、階上は豫備商品の置場位が上の部であるにも

拘らず、この店はむしろその逆であると云ひたい、

階下と大差なき程の廣い販賣場に、ところ狹きまで商品の山積を見る——

幾十と竝ぶ賣台——よく分類され、よく整理された調和美——

殊に、陳列、配置された悉くが高級呉服の粹である、所謂デパートの、設備に依る眩惑美はなくとも、床しさと、柔かさは十二分に味ふことが出來る。

丸柏を評せんと欲する者は先づこの階上を見てから——と申したい。

「——さすがに驚かざるを得ませんね、田舍者ながら、各地のデパートや、呉服專門店もかなり見て居りますが、この店の感じは獨特のものですね、呉服そのものとしては、全くこの地方のナンバーワンでありませう——鄕里の人達にこの狀況を見せてやりたいです——」

「そんなに云はれますと恐縮です、しかし呉服に對しては常にベストを盡してゐます——それでは簡單にまわつて見ませう。絹布高級呉服は、殆んど階上に

あるのですから——」

Mは例の通り說明をし乍ら先に立つ——

A氏は導かれるまゝに常識的な、そして鋭い注視を怠らぬ——時々ガラスケースの中を覗いては珍問も發せられる。

中川通に面する窓側に、各種フロシキ部がある、次がコート地部、男銘仙部、綾糸男高級品部、女御召部、肩裏用品の順である。

中央部にまわれば本場大島部、高級特殊織物部、小物部、半襟部、少し奥に寄れば、名古屋帶地、仕立帶地、裏絹類の各部がある。

多忙を極めつゝある、そこ、こゝ——顧客と店員の間を縫つて、ぐるぐゝ巡る——

最奥の處に京呉服部があり、燦然たる呉服の殿堂の中樞を語つてゐる——

紋服、丸帶、訪問服、散步着、長襦袢、羽二重、錦紗、縮緬、各種生地、小紋等々々——擧げ來れば際限がない——。

一枚幾百圓の振袖も、一筋何百圓の丸帶も、こゝにあることを話してA氏の滿足げなる破顔を廊下の方から、事務室の處へ導いた——左側のドアの中を指してM氏は語る、

「——これは、私設電話交換室です、常に女店員の係が詰めてゐて、店内と局線との交換をしてゐます、今の處本電話が二つ、私設が五つですが追々澤山出來るでせう」

一寸語を切つて右側のドアを排し、事務部を紹介する。

「茲が一切の中心であり、參謀本部です、この室の次が眺部兼、和裁處理部になつてゐます——ではこれで店舗の御案内は終りました——もう正午も近いやうですから、こちらの應接室で、晝食にしませう——サーどうぞ……」

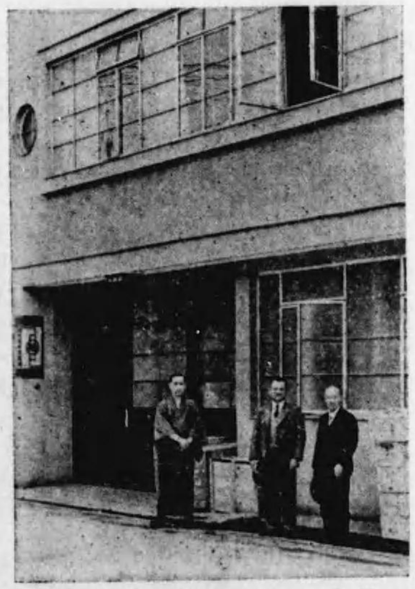
Mは愛嬌よく、交換室横を通つて四疊半にA氏を迎え入れた。

食卓での會話も無論店のことが中心であつた、手洗所の設備が最新式淨化裝置

であることや、レジスター（金錢登錄出納器）が七台あつて、一台の價格が千圓以上であることや。電燈の數が百五十個あることなど、問はるゝまゝに話の種は「盡きない——

店の晝食の時で、少しは客が歸られたか靜かになつた。

どこからか、自轉車のベルと、物賣の笛の音が錯綜して春の食卓は、のどかである。



店舗の參觀

（昭和十一年二月二十七日下關要塞司令部「可」）

別館の紹介

——昭和十年四月現在——

午後二時——

晝食をすみてから、一寸市内を散歩して來たA氏とM——別館の前に佇んで話してゐる。

「——店と別館が續いてゐれば申分ありませんね、しかし間にたつた一戸だけはさまつてゐるだけですから——不便と云ふほどでもありますまい、別館の外觀はなか〳〵モダンですね——」

A氏は健康さうな顏をして別館を仰いでは話しかける——

二人は珍しいほど大きいガラス戸を開けて内に入る、A氏は朝からの見學に疲れもせず熱心である。

これから別館の紹介をする——約束であつた。

耀やく現全容の鳥瞰

こちらは二階から先に——と入口左隅の正階段を上る——

先づ、三内町側に面した大廣間——三十疊の正面に二間の大床あり、大雅仙全紙に墨痕淋漓、「團結」と大書せる掛軸がある。

「この廣間を柏進寮とも云ひ、講堂であり、道場であり又、寮員の寄宿舍でもあるのです、通勤者を除く在店男子の憩ひ場をも兼ねてゐます……」

A氏は只默して頷くのみ——

Mは滔々と語り續ける……

時に修養講演會を開催し、主婦會、婦人會等の社會公共的方面への奉仕もなせば、店内の向上に資する、商業講座、サンデー例會、各種講習、柔道、音樂等、あらゆる機會に利用するのがこの廣間である。

「——どうぞ、郷里へお歸りの際は、店員の父兄の方へ、明暮案じてゐられる子供さんの起居の實狀をこのまゝお話し下さいませんか。特殊の御家庭は知ら

ず——農村一般の實狀に照して勿體ない生活だと私達は信じてゐます——」

「——さうですとも——この木の香、新しい立派な宿舍、嚴肅な空氣の漂ふ廣間に、生活する者は幸福です、私も若かつたら茲の店員を志望して——などゝ思ひますね——」

「しかし——又店員諸君も、よく働きますよ、酒もタバコも呑む人はゐません、營々として奮闘する姿は、只拜みたくなるものですね——」

Mは泌みぐ〳〵と感謝の面持で語る。

總ガラスの洋窓から午後の光が流れこんで、とても暖かい。

やつぱり春だと思はせる——

ラジオ、蓄音器、オルガン等の備品も全員の爲に、優秀品のみ用意されてある

と云へば、

「——全く學校ですね、いやそれ以上でせう……」

と、A氏は繰り返される——

一切を本當に生かせて用ひれば、その通りだとMは思つた。

それから、國家的祝祭日に於ける式典の盛大、莊嚴であること、元旦の餘興が堂に入つたものであることなど說明しながらこの室を出る、出がけに床わきの豫備室を一寸覗いて廊下を左へ折れ、十疊の座敷に通る。佛間兼客間である、店祖の靈前に一禮して、この室は別館の樞要部であることを傳へるに止め、又廊下に出て、客間裏の店員勉學室をお目にかける——、

聊か狹隘ではあれど揃ひの机に、寸閑を惜しんで學びにいそしむ若人の努力が偲ばれるのであつた。

次は婦人室である。

男子勉學室と正反對の、客間と廊下とを隔てた最南端の七疊——獨立室——止むを得ぬ事情の爲に通勤出來ぬ女店員の宿所であり安息所である。

A氏は眞劍そのものゝ態——

「これから、三階へ登つて來ませう、別に見る必要もありませんが、折角ですから——」

「あ——それでは三階もあるんですね、外部からは二階のやうでしたが——」

別館は、昭和八年四月の新築——新しいのと、設計が便利に出來てゐるので、どこを見ても感じが良い。

階段の中途の壁に、柔道部の稽古着と庭球部のラケットがづらりと竝んでゐるので、A氏は脚を止めた。

「なか〳〵至れり、盡せりですね——」

「テニスコートも用意はしてゐますが、忙しいので——思ふやうに出來ぬのが殘念です」

三階は、上りつめた處が洗濯物處理場である、ガスアイロンの設備もあり、年

中專任の老婦人がゐる——

三階とは名のみ、洋風屋根裏の方が當つてゐるかも知れない。

雜然たる中に店員の所持品が周圍に置かれ中央の廣い板張りの處は、昨年まで店員の娯樂場として、ピンポン台が二つ設置されてゐたが、雜貨部の進出につれ豫備品置場に使用されるに至つた。

說明をし乍ら二人は屋上に出る——

起伏せる甍を超えて、遙かに洞海灣上の名物、林立の帆柱を東南に眺め、西に聳え立つ高塔山を仰ぎつゝ、しばし俗情を洗ふのであつた——

「ではこれから階下へ參りませう——」

二階からは豫備室横の裏階段を下りる、中途の踊場から逆に東向きである、階段に面した右壁には販賣部其他の陣容、配備掲示がされて物々しい感じがする——

降り詰めた正面が全員の食堂である。

引戸を開けて、兩名が入れば、時間外で誰も食卓に就いてゐる者はない——

テーブルは高く、長方形で二台、ラッカー塗りのスマートな色である、椅子式であり、食事毎に任意交替とし、一度に二十人余の着席が出來る。

茲にも、小さい掲示板が備へてあり、總務部の指令、その他の發表がある。

食堂の右裏が炊事部、調理された副食品は、兩室の境界にある新案兩面戸棚に配置され、各自隨意に取り出して頂けることになつてゐる。炊事は全部ガス設備で、係員の利便は申すまでもない、しかも床は食堂と同じ平面の板張りで、地下には米炭の貯藏庫を設けてある。食堂は何と云つても、全員活動の源泉をなす處——

「農村の現狀と對比して、お店で働かれる方々は惠まれ過ぎてゐると思ひますね——」

A氏は少し興奮を感じてゐるらしい。

食堂を出て、左の突き詰めが洗面所、其奥は浴場である。

八十に近いタオルと用具、それ〳〵所定の場處に竝んでゐる。

浴場は湯屋のやうに廣い。

やがて引返し、豫備商品の置場を見る、別館の階下は大半が商品の倉庫である

卸問屋の觀を呈するほどの豊富さである。

「——販賣場の方にあれだけ大量にあり乍らまだこんなに用意されてあるとは——今日は驚き通しですね……」

「——お蔭さまで、不思議なほど賣れてゆきます、御覽の樣に毎日、荷物の來ぬことはありません——」

Mは今入荷された土間にある數個の大荷物を指し示すのであつた。

高い天上にも大規模の棚をつり、縱横に商品の堆積を見る、別館の資本だけで

も莫大である、廣い土間は入口から奥まで拔け、土間を隔てゝ正階段裏からフトン綿の置場となつてゐる——

綿の常備×千×貫、年間の販賣數は製造會社も驚くばかりである——

Mの說明は徹底して絕えやうとせぬ。

最後に洋裁部——

三內町側の窓ぎわ全部を專有し、部員は十名內外、多忙期には臨時員も加へて尙足らぬ盛況を來す——無論他へも仕事は出してゐる。

ミシン六台を備へ、丸柏の洋裁部として漸く認められるに至る——

「——以上で、別館の紹介も終りました、さぞお疲れと存じます。二階の客間でゆつくり休んで頂きませう——さあ……」

「いや——疲れるどころか、今日は貴重な見學が出來てこんな嬉しいことはありません——有難うございました——」

やがて二人は床の間に對座する。
投入れの桃の花が、やさしい綻びを見せてゐる。
「――この店の現在も悉く先代店主の德のお蔭です――」
「何と云つても鄕黨の誇りです、榮譽です、しつかり願いますよ――」
――この夜、
A氏は店に一泊され、翌日午後の列車で國へ立たれた――。

第三篇、丸柏のプロフヰール

蔭に匂ふ恩縁の人々

生花には必ず止木と云ふものがあつて完全に根元を守つてゐる、止木は、生花それ自體ではない、しかし、止木なくては、おそらく生花の萬全を發揮することは出來得ないであらう。

建築に於ける、楔も又同様である。

あの外面から見えぬ、楔あるが故に、大厦も、高樓も、安固を全ふするのである。

事業の上にも表面に見えぬ、楔があり、止木がある。蔭に匂ふこの役目は、洵に貴く偉大なるものである。

吾が丸柏の店史を編むにあたり、先づ感謝すべきは、この、隱れたる方々であらねばならぬ。

丸柏のプロフイール

回顧する店史の裏面に、尊き楔となつて、一方ならぬ盡力と、恩惠とを寄せられし二、三の尊名を茲に錄し、深謝の誠を捧げたい。

それは、進展途上に於ける、丸柏の全貌を一層明確にすることであり、新しい肝銘と認識とを若き人々へ與ふるの道でもある。

感謝すべき恩緣の人々——

それは、全く、無私、無酬、奉仕の應援であり、丸柏存立の精神的、又直接的の貢献者であつた、店祖の遺訓が經糸ならば、この恩顧は、まさしく緯糸のそれである。

かくて、丸柏なる一卷の布は織られ來り、尙、限りなく織りゆかれるであらう。

店史の錦上、更に花を添ふる、恩緣の素影を寫して、心からなる謝志とする。

×

五十嵐長之亟先生——

なつかしく、いかめしいお名前である。

元の神奈川縣立高等女學校並に同女子師範學校の兼任校長であつた。

奇緣と云ふか、店祖の長女にして今の松浦繁夫氏夫人が、廣島縣三原女子師範學校在學中の校長であり、恩師である。

大正七、八年の頃、さうした師弟の緣が、先生を店と結び、やがて双葉時代に於ける、丸柏の店員數名を指導、薫育されるに至れるを端緒とし、爾來十有五年——全店の恩師たり、顧問として、今日に及ぶ。

一國の興亡が國民性の如何に依ると等しく、一舗の盛衰も亦、店員精神の如何に懸ること自明の理である。

店は、まさしく、店員の向背によつて、その運命は決定する。當時、丸柏の店員は、悉く、年少若冠、思想上累卵の危機に立つ小僧ばかりであつた。茫洋たる

人生に棹さすべく、羅針盤なき兒等は、餘りにも不安であり淋しかつた。

幾度か、脫線せんとし、蹉跌せんとして、燈臺なき暗夜にさまよつたものである。

この時——

恩師、五十嵐先生の出現は、まさしく、旱天に迎雲の歡びであつた。一介の小僧にとつて、無名の店員にとつて、これに超す、滿悅があらう筈がない。農村の學窓には不幸にして、春毎に巢立つ雛鳥の爲に、終生を導かるゝ愛の師は絕無であつた。

その迷へる小羊の前に、五十嵐先生は、曉天の星であつた。燦々たる希望と、光明を與へて、若人達を照し、先生の御蔭で彼等の苦悶を續けたる思想の陰影がからりと晴れて、輝やかしい前途が展開されたのである。先生は吾等の丸柏にとつて、偉大なる巨人であり、思想上の慈父であつた。

先生の存在なかりせば、或は丸柏の店史にも、店員達の生涯にも、幾分の異變はまぬがれなかつたであらう。

多忙なる女師校長の顯職にあつて、しかも僻陬の一小商店に關心を持つさへあるに、その內部に蠢動する、微々たる少年店員達の爲に、貴重なる時と物と心とを空費して、尙愉悅と感謝を漏らさるゝ先生は、實に、現代稀に見る眞の敎育者と云ふべく、この師を持つ吾等の幸甚は、何に例ふべくもない。

風姿、淡々、しかも滿面常に朗和——悶を訴へれば百里の道を遠しとせず、時に勵聲大呼、若人の肺肝に迫る烈々の句々、歡談あり、苦言あり、緩急の妙に徹して、淸濁併せ抱くの心——洵に得難き先生である。

往年數名に過ぎざりし店員は、今や實に七十有餘を算し、恩育に浴せし當時の少年達は既に長じて、丸柏陣營の帷幄に參じ、縱橫無盡の奔躍をなしつゝあるを思ひ、轉た今昔の感に堪へぬものがある。

飜つて——現在横濱市に住し、玆九州の地——學校ならぬ學校の敎へ子達が、商野に馳驅する壯觀を、はるかに眺めて、莞爾たる、先生の欣快や如何に。

現在、先生の芳齡六十有一——

先生は今曹洞宗大本山總持寺設立の、鶴見高等女學校並に光華女學校の顧問として、又全責者として餘生を尙敎育界に捧げ、御盡瘁中である。

過去に於て丸柏の貴き楔でありたる先生は、今後も、變りなきなつかしの恩師である。老來、益々健に、いつまでも、よき吾等の精神的顧問として、あの溫かき撫育を仰ぎたい。

蔭に匂ふ恩緣の人として、筆頭に特記する所以である。

下田房吉氏——

氏は店祖が若松市に於ける唯一の知友であり、無二の相談相手であつた。

もと〳〵三十年來の知合ひであれど、最初は單なる得意先としての交渉から次第に深く、住居の近接せることが、交友の最大導因でもあつた。

尤も店祖が下田氏と胸襟を開いて語る樣になつたのは、大正十年頃、卽ち、第一回の類燒以後であつたと思はれる。

かの店史に一エポックを劃した、大正十一年の懸賣全廢に就ては、店祖も尠からず、頭を惱まし、案を具して下田氏を訪れ、夜を徹することも續いたと云ふ。

當時該案は、さほどに重大視され、店の浮沈を賭しての事件であつた。

先代が、人知れず苦慮し、議を下田氏に諮ること、連夜、凝首實に六日に及びしと聞く。

一路革正を叫ぶ急進派の店員達は確信を以ての建白であれど、それは何と云つても單純であつた。拙速の誹りは免れない。一度立場をかへて靜考すれば、しかく簡單になし能はぬ店主の境地も充分窺ふことが出來る。

しかし、當時の成行は、勢の赴くところ、巧遲よりも速決を要した。諮問に對する下田氏の應答は、同案の死活を制するものであつた。

かくして幾度か岐路を彷徨した全廢案が、やがて可決を見るに至り、低迷した暗雲は、拂拭され、丸柏のゆくてに明朗の凱歌が擧げられたのである。

この間、下田氏の盡力と、先代の胸裡を鋭察しての干與は、並々ならぬものであつた。

筆者は、當時これを知らず、後年ふと耳にして、さもあるべし、と首肯したことである。

氏は全く智の人であり、腹の人である。

しかも、便々たるあの丹田に、炬の如き情を湛ふ。

事に臨めば、時に快刀亂麻を斷ち、又は、持久有終の美を擧ぐるの兩面を具備す。

洵に明鏡、透徹の資、活殺自在の妙諦を見る。この點に於て店祖にとり、恰好の相談役であつた。

漸く昵懇の度高まるに連れ、店に關する諸種の問題はよく相談したものである

昭和元年に於ける——

現店舗敷地購入交渉の如き蓋し下田氏の貢献甚大と云はねばならぬ。

彼我の中間に立つて、常に奇策縱横、行くとして可ならざるなき流石の軍師も苦慮慘憺、痩せる想ひをしたと云ふ。

丸柏の歴史に第一期飛躍、中興劃期時代として、永久に謳はるべき、借舗より吾が店へ——の推移過程に於て、下田氏の隱れたる斡旋と盡力とが打ち込まれあることを明記せねばならない、思へば悉くが恩惠である。感謝である。

以來丸柏に對する下田氏の存在は、一相談役としてよりも、密接不離、店の憂い事引受處としての觀を呈した。

敷地購入成るに及び、幾許もなく、歡びの新店舗竣成移轉を遂げ、續いて、悲しき店祖の逝去となつた。

店の欣愁は、同時に下田氏のそれであつた。

店祖、病篤しの頃、連日、或は、日に幾回、病床に下田氏の見えぬことはなかつた。

店祖が第二の故郷、若松市に於て、幾多交友の中から、大事を託して語るべき知己は、遂に、下田氏の外にはなかつたらしい。又あるべき筈もないであらう。

眞に一切を超えて握手し、肝膽相照す時、そこには麗はしい人情の花が咲き、清らかな交りがおこる。

この意味に於て、下田氏は從來無二の相談役であつた。今吾等は永年の勞を謝すると共に、その長壽を禱り、益々店の發展に、蔭なる御力添へを懇願したい。

やがて第二期、第三期の飛躍に備へて、下田氏の盡瘁を俟つこと寔に大なるものがある。

あの默考より發する電光の如き慧智と明斷とは、丸柏の心臟部に直通して、益益諸機能に活潑を與へるであらう。

吾等は、蔭に匂ふ、氏の功績と知遇を錄して深甚の感謝を表するものである。

因みに、氏は幼少の頃、明を失し、鍼灸の法を學び、今や其道の權威である。

鶴齡を重ぬること、六十有六——

冥想端坐の裡に、一切を察握し、容貌常に矍鑠として、壯者を凌ぐの風あり、同慶の極みである。

後藤靜香先生——

元の希望社々主として、色々の意味から、一時多方面に知られた方である。

あの輝やかしかつた大集團も、昭和六、七、八年に亘る希望社異變に依つて、

脆くも崩潰し、希望社の名と共に、先生の名は、あわれ、泥土の蹂躙に委さざるを得なかつた。

吾等は、玆に、元の希望社並に社主の功罪を論じ、辯明を試みんとするものではない。

更に吾等をして、率直に言はしむれば、あの壞滅こそ、必然の歸結であり、とかく形骸にのみ囚れんとせし當時に於て、止むを得ざる、清算であつたと思ふ。

殊に爛熟期に於ける、社としての動きには、一種の失望と、尠からぬ寂愁をさへ催したものである。

尙 傳へらるゝ處を以て、事の眞相と假定するならば、あの末路こそ、まさに天道の公明を證するもの——感謝すべき成行きではあつた。

さあれ、忍ぶに耐へ難き世の痛罵と、冷笑と、白眼に葬られ、今不遇のどん底にありと見らるゝ、後藤先生を、丸柏の蔭に匂ふ恩緣の一人として取扱ふことに

或ひは、奇異の感を抱く者があるかも知れない。

しかし、玆に述べんとし、語らんとする點は、過去の生きたる事實に卽し、超然毀譽の外に立つて、吾等の丸柏に關する限り、抹殺し、削除し能はぬ感恩の片々を收錄するに外ならぬ。

隨つて、希望社の盛衰と、後藤先生對丸柏との關係は、自ら別個の問題であることを附言する。

更に要約すれば、希望社並に後藤先生から蒙りたる恩義は炳呼たる事實なるが故に、衷心深謝の意を表し、その他の移變に就ては關知の限りでない。尤も、吾等の感じたる恩顧は、丸柏自體の獨斷であつて、後藤先生としては、當時の希望社精神の種子が、玆に落下し成長したであらうなどゝ、微塵も御存じない筈である。

大正七、八年の頃であつたか、例の五十嵐先生を店に紹介し精神的結緣の勞を

とられた、現店主の令妹、今の松浦繁夫氏夫人幸氏が店員達へのよき指導誌として、發刊間もなき小冊子「希望」なるものを示された、幸氏は三原女子師範を卒業後、郷里の母校に教鞭をとつてゐられたが、家事の都合上退職し、直ちに來店——以來、炊事その他、店母代理として、幼き店員達に無形の感化を與えられた人である。

少年店員達は自ら伸びんが爲に、春に萠ゆる若芽の如く、何ものかを求めて吸々たる時であつた。

幸氏紹介の「希望」誌に盛られたる內容が、期せずして、若人の胸にピンと響くのであつた。忠を說き、孝を語り、信を謂ひ、義を述べる處、言々珠玉の大文字として、紙背に流るゝあるものを若き魂は受け入れたのである。

一見貧弱なる小冊子は、活字ならぬ活字を通して若者達を忽ちに魅了し去つたやがて希望誌は讀者層の擴大につれ、旗幟を鮮明にした。宗派を超え、民族を超

え、年齡と性別の外に立つ——と云ふ點に偉大なる引力を感じたものである。かくして、希望誌の著者、後藤先生に對する、信賴は讃仰となり、所謂希望社精神なるものを、丸柏の指導精神として取入れるに至り、全店統制の根幹をなした。

爾來十有餘年——間斷なく、打ち出された希望社の運動に共鳴し、只管、後藤先生の人格を中心に、その提唱の誤りなきを信じつゝ、希望その他數種の月刊冊子を基調とし、全員の修養と、研學に資し、其精神を、經營の上に織り込んで、總向上の實現に役立てたのである。

若き人々の琴線に觸れたるもの——

それは、謂ふ處の外形的希望社運動でなく、全く後藤先生の、內に溢れたる聖なるものが、最も淨められた、瞬間に於て、發したる閃光に外ならない。

丸柏は、その聖なる閃きを、照らさるゝまゝに、よく浴び、よく咀嚼し、その眞髓を最も適確に把握し得たと信じてゐる。

吾等は、過去に於けると同樣、今もなほ、店の礎石に滲透して、丸柏精神の一部を形成せる、後藤先生の偉大なる感化と、その功績に對し。滿腔の謝意を捧げざるを得ない。

後藤先生は著書を通しての恩師であつた。

あの烈々たる語句と、豐かなる文藻とは、青年の胸奥に迫つて、脈々一種の律動を與へずにはおかなかつた。

全員が、先生の著書を常に愛誦し、往く處、止まる處、その寸言尺語に接しては、刺戟され、鞭達されつゝ心の成長に大過なきを保し得たことは、申すまでもない。今の丸柏に、幾分でも、統制的長所が見出されるならば、それはまさしく先生のおかげである。

とまれ、丸柏の內的成育に、後藤先生の薫化は深大であつた。特筆して感謝する所以である。

吾等にとつて、五十嵐先生は直接的の顧問であり、師父であつた。

後藤先生は、間接的の指導者であり、恩人であつた。

何の幸ひか、惠れたるこの環境に、吾等はすく〳〵と伸びた、勿體なきこと共である。

嘗つて、投じられたる一粒の種子が、奇しくも、特殊の使命を帶びて、こゝに育ちつゝあるを聞かれしならば、先生もさぞこそ、驚喜されるであらう。

先生は今、帝都の一隅に、過去の一切を、逝く水の流れと觀じ、光風霽月の心境に立つて、甦生の道にいそしまれると聞く——

それも、これも、すべては神の聖旨として、至上至善の攝理であつた。

吾等は玆に、思ひ出の糸を手繰りつゝ、聊か當時の恩義に報ゆるの微衷を明らかにする。

修養團

×

人よ醒めよ、醒めて愛に歸れ
愛なき人生は暗黑なり。
共に祈りつゝ、總ての人と親しめ
吾が住む鄕に
一人の爭ふものなきまでに。
人よ起てよ、起ちて汗に歸れ
汗なき社會は墮落なり。
共に祈りつゝ、總ての人と働け
吾が住む里に
一人の怠るものなきまでに。

×

修養團は人も知る、汗愛の本城、白色倫理運動を天下に呼號する一大集團である。

主幹蓮沼門三先生は生ける聖者として、萬人景仰の的――大正九年頃より參加し、先生の人格に私淑して修養に努め、全員指導の一端に資ずるを得た。

殊に潑剌たる若人の意氣を、彌が上にも高め、全員團結の偉力を益々昂揚せしめたる修養團の功績を看過することは出來ぬ。

今の中樞店員は殆んど、修養團の講習に參加し、其精神を、日常生活に取入れて、躍進したものである。

團體訓練の最たるものとして一糸亂れざる、精神統制に役立てると同時に、この運動を通して國本確立、皇道忠誠への至上方法と信じ汗愛禮讃を續けたのであ

つた。

汗と愛と——

それは、吾等の生活信條である。

丸柏の根底は、玆に根ざし、永久不變であらねばならぬ。

この道を識り、この道に住するもの、主幹蓮沼先生に感謝せざるを得ない。

正道奉仕、商道報國の大業は、畢竟汗愛の實行に外ならぬ。

丸柏建設の蔭に、かくれたる礎石として、又未來への指標として、修養團並に蓮沼先生に負ふ處、大なるを謝し、錄して厚恩に應ふ。

事實が語る吾等の誇

——昭和十年四月現在——

×

吾等は若し
而して未成品なり
故に——洋々たる前途をもつ
不備あり、缺陷あり
然れども——
淸く尊き理想に生く
高きあこがれ
若さの壯觀——
そは……吾等が唯一の誇りなり

丸柏のプロフイール

×

茲には、人間としての貧しさと、幼稚さと、未熟さとはある。

而し——樂しい平和と、成長と、努力とは忘れない。

茲には、見苦しい爭ひと、高壓と、叱責がない。

只——床しい寛容と、信賴と、溫情とが許される。

×

何と云つても、未完成の若き人々の集ひである、修養も、學識も、常智も、技倆も、手腕も——全く問題にはならないであろう。

しかし、かくの如く缺陷を指摘さるゝが故に嬉しい、そして勇躍する——

吾等の誇るべきは、まさにこの意氣である、人格の陶冶と云ひ、人材の磨育と云ふ、その完成を目指して、努力する處にこそ、吾等の欣快がある、愉悅がある。

現狀は、しかく貧弱であり、心細さの極みであれど一片耿々の正氣逃る處、天馬空を往くの放れ技も可能であり得る。

今、吾等の誇りとして茲に列記すべき點は乏しき現下の事實から拾ひ集めた斷片である。

小さけれども生きたる眞實である。

×

1　現金仕入と現金販賣の實行

云ひ易く行ひ難き小賣商店の難關である。吾等は大正十一年以來これを斷行し㊙丸柏經營の根幹をなす、これある限りこの堅壘は不拔であろう。

2　優良、正廉、大量の三大信條

事實に勝る雄辯なし、良き品を買ふ身になつて仕入、而して販賣する上に——萬全を期する鐵則である、各產地一流會社の優良製品のみを扱ふのも故なしと

せぬ。

良く、安く、豊かに——それは萬人の熱求であつた、吾等はその點に就て懸命の努力を續けつゝある——

3 **流行の原泉をなし商品の責任を重んず。**

流行は丸柏から——吾等はこのモットーを翳して驀進する、商品に就ては絶對の責任を持ち、取換へ、返金自由である、商品を賣るまでに信用を賣る店でありたい。

4 **やさしく溫かき店主**

寛容と溫情の人——それが吾等の店主である、絶對に叱らぬ人、稀に見る謙讓の人である、こんな逸話があつた。

或る年の決算に——店難不遇の際にも拘はらず店員に莫大な賞與金を與へられた、然るに店員達は申譯なしとて故を述べその一部宛を見舞の意味で店主へ贈つたのである。

無論僅少なる額であつた、店主は固辭されたが結極快よく受納された、それから數日して——一店員が感激しつゝ開く新聞を見れば、珍しい美擧として次の如く發表されてある。

『國防献金、××××也　柏原呉服店々員一同』

零碎の醵金に莫大の金額を添へて、無斷のまゝ、しかも店員一同の名儀で國防の爲、献納されたのであつた。

この種の美擧は、鄕里に於ても、しばゞ耳にする處、店祖の衣鉢はかくして完全に守成されてゆく——

この店主を中心に、働き得る吾等は幸福である、嬉しい誇りである。

5 **常に和氣藹々の全員**

お互に扶け合ひ、勵まし合ひ、さうして、樂しい生活が續く——吾等が最大の

誇は、この和協一體に外ならない、長い年月の内には、雨の日も、風の日も、又雪の日もあるであろう、しかし本當に皆んな仲よしである、幸福に、はち切れさうな欣びを湛えて、男女實に七十有餘名の若人達は、毎日いそ〳〵と働いてゐる、一度この店の空氣に觸れると、故郷の實家よりも、其他のどこよりも居心地がよいとは誰もの僞らぬ實感である。どうしてかしら？　それは曰く云ひ難し、人生は、幸福だと感じ得る者のみが幸福を惠まれる。

6 **監督なく强權なし**

自發の生活は嬉しい、自治の生活は愉快である。一糸亂れざる秩序と統制を保ちつゝ、丸柏の車輪は運轉し再進する、しかもそこには何等の監督なく、嚴しい强權は見當らない。皆んな樂しい所以である。

7 **朋友、兄弟、同志**

麗はしい花園の心地がする、それは皆んなが朋友であると同時に兄妹であり、

又同じ目標に突進する同志であるからだ。不退轉の希望が湧くのも當然である、なつかしい店ではある。

8 **人格の完成を主眼とする**

この事業を通して眞の人間になりたい、それが窮極のねらひである。修養の爲には、經費を顧みず凡ゆる機會にその方法を講じてゐる、研學然り、體育又然りである。男子の爲の學術講座、書道倶樂部、音樂部、柔道部、庭球部、卓球部、青年訓練等の施設——女子の爲の作法、生花、茶道等の便宜を計りつゝあるのも、さうした、目的達成の趣旨に基くものである。向上は無限である。若き日の記念塔を今の内に築成しておこうではないか。尊く床しい店主の慈心に應へる爲にも——

9 **營利と修道の兩全**——

これは吾等の理想であつた、拜金至上に墮するなからんことを念ずると同時に

正しき道を求めつゝ、故山にある老ひゆく父母に物的安心を與へ得るならばこれに越す幸福はない。

しかも、吾等は其立證をこの店に於て、明らかに見出してゐる、有難き極みと申したい、至幸の因、又茲に存す——

10 柏苑會の存在と柏進寮

男子全店員を正會員とし、昭和三年九月に發會し、柏苑の名を冠した、丸柏の經營的方面より全然分離せる家庭的、內部的の生活向上機關であり組織である生活改善の實行も茲から發せられ、その恩惠に浴するものは全員である。時に會誌の發行もする、柏苑會の將來は多望である。

柏進寮は別館の一部をこれに當て、在店男子の統制部として重要である。

11 禁酒、禁煙、その他

店則でもなければ、主義でもなく、何の制約もないのに、接客など、止むを得

ぬ場合の外は、全員悉く禁酒である。禁煙である。隨つて、花柳紅燈の巷などに出入する者は絶無——この點だけは、まさしく天下に誇り得る奇蹟であらう

澆季の現代青年にして、婚前の童貞果して幾パーセントぞ、丸柏の全同志は、清純無垢——眞に不思議ならぬ、不思議である、この事實を握つて、吾等は全日本青年の覺醒を絶叫したい。

尙男店員の大半は、店で相互に理髮をする。信用販賣の購買部も設置され、店員の生活は惠みと歡びに輝やいてゐる。

12 燦たる不磨の店是

正道奉仕、商道報國——

これぞ、吾等の店魂である。一切の根本である。丸柏精神のシンボルとして、仰ぐにふさわしき、八大文字——正しき道をもつて、奉仕し、商ひの道に依つて忠誠を捧ぐと云ふ、第一義に生くる至高の大道である。眞に心して努むるな

らば、黄塵を浴びて、送迎する店頭の生活にも、光輝は、燦然として、映發する。

この働きを通して報國の大義に徹せんことを誓ひたい、吾等が誇りの最たるものである。

陣營を護る同志の群

——昭和十年四月現在——

より善き大なるものゝ爲に、小我を沒却して、渾然たる一大有機體を結成し、長短補足の實を擧げつゝ、大業運營の目的を貫徹しなければならぬ——

そは、吾等の夢寐にも忘れ得ぬ念願であり建業の礎志であつた。

角なるあり、圓きあり、大、小、もとより千差——而して萬別の凹凸その宜しきを得る時、初めて、融和し、强靱なる組織體の出現を見るに至る。

この意味に於て、吾等の丸柏は、尠けなくとも今日まで、理想に近き歩みをなし來れる心算である。

いつの時、いかなる場合と雖、太陽に於ける群星の如く、店主を中心として協同依存、全力發揮、以てその實證を握り、こゝまで到達した。

今陣營を護る人々として同志を列擧する所以は、各自功蹟の差異深淺を論ずるにあらず、要は現下の店勢を一層明確にし、丸柏の横顔を眺めて、全員總努力の實績を考察したい爲である。

見渡す處、一人の英雄的色彩を帶べる者なく、傑出せる非凡兒も見當らない樣である。

しかし——一度丸柏の名に於て、大同團結的偉力を發揮せんか、騎皷堂々、懸軍萬里を往くの意氣を示すであらう。

況して、全員未だ青壯、幼若——

やがては、この中より有爲の士、拔群の材も輩出すべく、期して、その日の來るを樂しむものである。

以下第一線に立つ人々を入店順に列記す。

×

田頭槌市——大正元年八月入店

店員の草分として最年長、最古參者たり、永年の經驗を土臺とし、各部の應援に當る、別に收納主任を兼務す、勤續二十三年

宮地万吉——大正二年十月入店

店祖の義弟にして、終始帷幄の樞機に參與す、現在支配人として店主を補佐し縱横の畫策に任ず、尙洋反、雜貨仕入部に長たり。勤續二十二年

柏原　濱——大正五年四月入店

店祖の次男にして、現店主の舍弟——常に總務部の重責を負ひ、店主を補佐し

樞務を司る、會計部並に庶務部の長を兼ぬ、勤續十九年——

村上幸土——大正六年三月入店

由來謀議の驥尾に列し、常に鼎足の一を以て任ず、現在全呉服の仕入部主任たり、勤續十八年——

大石岩義——大正八年五月入店

今、販賣部の主勢たり、二階の支配として京呉服販賣主任を擔當す、勤續十六年——

柏村一夫——大正十年三月入店（本姓柏原）

販賣部の重責を擔ひ、一階の支配として、その呉服部販賣主任たり、勤續十四年——

松浦　俊——大正十二年三月入店

販賣部の柱石として、現在二階副主任たり、京呉服部に活躍中——勤續十二

年——

宮村正槌——大正十四年三月入店（本姓宮地）
現に新興雜貨部の建設に當り、その販賣主任として、奮鬪す——勤續十年——

茨木　坦——昭和二年三月入店
店祖の薫陶を蒙りし最年少者——販賣部より事務部に轉じ、現在庶務に携る。
勤續八年——

住屋喜代三——昭和三年二月入店（本姓松浦）
中年にして參加し販賣の主力に立つ——今一階呉服部副主任たり勤續七年——

村山俊三——昭和三年三月入店（本姓村上）
現在販賣部の中堅たり。京呉服部に健鬪中——　勤續七年——

宮地武——昭和三年六月入店
病氣の爲、目下休職中——

松浦清六——昭和四年四月入店

小林武三——同　〃

井川竹市——同　〃

村上實春——同　五月入店
相携へて販賣部の中堅勢力をなし、各部に轉戰活躍す。　勤續六年——

宮地　實——昭和五年四月入店

村上金三——同　〃
共に販賣部の中軸を以て任じ、後者は陳列裝飾係を兼務す。勤續五年——

大出忠義——昭和六年三月入店

大出德二——同　〃
販賣部員として、その前線に立つ——勤續四年——

松浦　績——昭和七年三月入店

陣營を護る同志の群

小林幹夫——昭和七年三月入店
宮地稔雄——同　〃
　共に前線部隊として、販賣に健闘——　勤續三年——
宮地平次——昭和八年四月入店
松浦治男——同　〃
柏原孝造——同　〃
　店務の習熟に懸命である。勤續二年——
桑原　孝——昭和九年四月入店
宮地正夫——同　〃
古川千里——同　〃
竹原　正——
　見習生として、精勵一途——

田頭源正——昭和十年四月入店
宮地春治——同　〃
小林善美——同　〃
宮地茂成——同　〃
　新入生——一切がこれからである。
茨木重太郎——昭和二年十一月入店
　別館擔任——勤續　八年——
宮地竹松——昭和七年七月入店
　別館擔任——勤續　三年——
沖　光子——昭和六年十二月入店
村上千鶴代——同　〃
福田イネコ——〃　八年　五月入店

松浦タツ子——昭和八年　六月入店
永峯マスヱ——〃　〃　七月〃
山本キヌ子——〃　〃　〃　〃
大戸キヨ子——〃　〃　〃　〃
西森　春子——〃　六月〃
大畠富久枝——〃　〃　十月〃
近藤　小浪——〃　〃　〃　〃
芳林　朝子——〃　〃　〃　〃
川口　幸子——〃　〃
齋藤カメヨ——〃　〃
福田　繼枝——〃　九年　四月〃
石橋ツキ子——〃　〃　五月〃

橋高　和子——昭和九年　五月入店
中村　初子——〃　〃　七月〃
松島　蔦子——〃　〃　八月〃
永田　辰子——〃　〃　九月〃
楠根　文子——〃　〃　十月〃
中村　操——〃　〃　〃　〃
枝松アグル——〃　〃　〃　〃
竹崎　妙子——〃　〃　〃　〃
松下　綾——〃　〃　〃　〃
中島　文子——
境　静子——昭和十年　一月〃
西島千鶴子——〃　〃　〃　〃

長谷川紀子——昭和十年　三月入店
竹原惠美子——〃　〃
加治ツマ子——〃　〃
木岐　勝乃——〃　〃
田中　幸子——〃　〃
戸田カズヱ——〃　〃
田村マサヱ——〃　〃
森田　春枝——〃　〃
佐倉井トサ子　〃　〃
郷森　澄惠——〃　〃
木原ミツヱ——〃　〃　四月〃
福島　房子——〃　〃　〃

販賣、洋裁その他に配備——

編者の言葉

ひた〳〵と渚の春や瑠璃の水

さうした瀬戸の海に浮ぶ島の奥なる草深き山家に育ち、野生文盲のまゝ、紅塵渦巻くと云ふ巷に出でゝ、店頭生活十有八年——

今、閑を惠まれたりとて、靜かに硯の埃を拂ひ、机に向ふなどゝ烏滸の限りであります。

しかし、いつの日か、赦さるゝならば、偉大なりし店祖並に店母の足跡と、店の歩みの節々を、書きとゞめて置きたい——否おかねばならぬ、と念じて居りました。

それは、この生活が、躬を以て味ひ、魂を以て學んだ成果であるのと、私共が眞人生の光明を發見し、不退轉の境地にまで進み得た、感謝の思ひ出だからであります。

なれど、文すべく辭に暗く、餘りにも筆持つわざの貧しきに——況して、匆々忙々、激甚の店務に追ひまわされ、寸暇なく餘閑なきまゝ、意を果たさずして、今日に及びました。

然るところ、過ぐる日の未明——

率如として、店母の長逝あり、店の一大悲愁事に遭遇したのであります。

時に私も、鄕里にて營まるゝ葬送の儀に列すべく、一切の準備を了へたる時、何等の不幸か、突然發熱——病魔の冒す處となり、床上に呻吟する身には參列斷念の外ありませんでした。

不孝の兒は遂に不幸の子であつたのです。

爾來月餘——詫ぶる心で床中に、この案をまとめ、快癒するや、直ちに、禿筆を呵して、この一編をものした次第であります。

これは——題名の示すが如く、沿革と現勢を語る『丸柏の展望』であり、丸柏とは？——の問ひに對する一束の答案でしかありません。

輯むる處、寔に簡、述ぶる處、至つて疎、されば資料の不備と、調査の粗笨から、記述の上に種々の缺陷を生じ、尙史實に基くとは云へ、如上の理由に依つて隱れたる貢献者の記載漏れ等もあらざるやと懸念致して居ります。

而し乍ら、この書を編める主眼は、丸柏精神の眞景を忠實に、大膽に、後世へ遺さんとの意圖に依れるもの——遺漏の點あらば、當然、編者の罪として、幾重にもお詫び申上げます。

とまれ是正は又の日に、と申添へるに止め、この稿の終結を急ぎませう、

×

幼く若かりし頃——

思ひ出の頁を繰れば店頭に送迎した幾春秋は、眞に夢の様であります、なつかしいパノラマです、嘴の黄ろい小僧のくせに、先輩と口角泡を飛ばせ、正義の爲に——と肩をそびやかしてゐた、あわれな正義時代もありました。

其他大志の前に——と、隨分店祖に御心配をかけたものです、それほど、幼稚な大志時代があつたやうに記憶して居ります。

又無學の悲哀を歎じ遊學の心止み難く、幾度か危機に臨み、脫線せんとして、辛くも、師父の溫かき手に抱かれて、全きを得た、恥しい過去を持つて居ります笑はないで下さい。こうした脫線小僧達が、絶大なる四圍の恩惠に哺くまれて、落伍なく、挫折せず、やがて大丸柏建設の爲に、血盟、奮進する様になつたのであります。

紺木綿の前掛に、脛までの手織着で古いノレンの陰から、うす汚い顏を覗かせ

てゐた、二十年前の誰彼を想像して下さい。

全く笑へぬ喜劇の花形達でした。今こそ、いと、すましてはゐれど、當時はそれで切實な人生の苦惱者であつたのです。

しかし、天は私共に、清きあこがれの萠芽を與へ、盟友と相携へて、それを終生抱き育てよと敎へてくれました。

その爲に、今日のあることを思へば、先進の朋に對し深き感謝を捧げざるを得ないのであります。

時に、談論風發——道を語り、理想を說く……

幼く若かりし日の私共は今の若き人達よりもまだ〳〵幼稚であつたと思ひます

頭は空疎、姿は貧弱、とてもお話しにならかつたのです。

顧れば二た昔——それは只々感謝の思ひ出であります。私が假りに大學を出てゐたとして、何程のことがありませう。私は今、すべての點で、大學出身者以上

に惠まれてゐると信じてゐます。

勿體ないと思はぬ日はありません。

全員仲よく相率ひて——雲の涯、理想の嶺へ突進致しませう。

本書を編める最大の理由がそこにあり、それを念ずる禱りの心が凝つて、貧しいペンを運ばしたと申しても過言ではありません。

『丸柏の展望』は、この意味に於て、門外不出を原則と致します。他に示ずべき性質のものでなく、私共『丸柏』につながる人々の一つの覺え帳であります。

蛇足が意外に長くなりました。

せめて老店母御在世ならば——と、この書の上梓にあたつて、遺憾に堪えません。茲に聊か由來を述べて、編者の責をふさぎます。

靜かに筆を止めて、目を轉ずれば、窓外の山々は、花曇りに包まれて、街の甍も、何となくよどんで見えます。

麗日遲々——おゝ酣の春！

——昭和一〇、三、二五——

高塔山麓なる店主宅の一室にて

村　上　幸　士

『丸柏の展望』を讀みての思出

元神奈川縣女子師範學校
神奈川縣立高等女學校 校長
五十嵐長之丞

時は彌生のつごもり、『丸柏の展望』は一路平安、横濱博覽會の眞盛りに届いた。春雨ならで雪まじりの陰鬱、來つて訪づる人もなし。是れ幸と、午後一時から『丸柏の展望』を讀み始めた。初めの程は、二三十頁も讀んであとはゆるゝと思ふて、頁を翻すと、一頁は一頁毎に、進めば進む程に、詩を味ひ小說に魅せらるが如き、陶醉氣分となり、めくる頁の感興は夢中へと、息つく暇もなく、一瀉千里の進行、午後の五時には、凡てを讀破した。而して、詩か趣味の事實史かと讃嘆の長大息、『幸土君、君の文藻は天稟だ』ぞと、當年の幸土君が、頻りに

映じ來つて、在りし其頃が走馬燈の如くに、來往して沈默の冥想に入つたも、是非ぞなき。

當年の丸柏に鼎足の三人があつた。曰く宮地萬吉、曰く柏原濱、曰く村上幸土だ。私が女子師範校長として廣島縣三原町に、在住して居つた頃、緣あつてか此三人は、絕えず、私の宅に來往した。時の萬吉君は二十歲、濱、幸土の兩君は、十六、七歲かと覺えて居る。青年と云はむより、肩上げも、おろさぬ紅顏の少年であつたが、如何にも潑溂たる生氣は、雄々しく人生の旅路に、棹さゝむとして寢ても醒めても、希望の焰に燃えつゝあつた樣に見えた。然るに、現實奉仕の丸柏は、影の薄い小賣の微商店、彼等の驥足を伸ばし、彼等の希望を滿足せしむべき、何にものも無かつた。あはれ、彼等はまだ、『辛抱』と云ふ二字を味ふべく餘りにも、弱冠の世間知らずであつた。トウ〳〵彼等は爆發した。男子志を立て事を成す、須からく大都にあり、人は天賦の性に從はざるべからずと、萬吉君は

大阪目指して、其志を舒べんとし、幸土君は文に志して、苦學力行の大成を夢みた。何れもが不平滿々、前途の暗澹に失魂し、かて〻加へて、青年期の性の發動は、腦裡に矛盾の戰を起し、悲喜交々の情感に、懊惱煩悶、安き日とて無かつた而して當年開祖の溫情も、愛の手も、之を導き之を慰むべく、彼等は餘りにも燃えきつて居る。開祖も致し方なく、悔ゆる時もあらうにと、默々暗涙を呑んで、凡ては『時が解決する』と、大きく放任された者と、見ゆるも是非なき次第である。

爲にや、萬吉君は一日走つて、余が在住の三原に來た。而して、是より大阪に飛び、大望の緒に就かんと、意氣頗る軒昂であつた、あはれ、大阪にさへ往けば仕事は溢れて居る山程ある、大成期すべしと、希望は越えて空想の憧憬、痛々しくもあり、一夜諄々と、其妄を說いたが、青年の志、一氣に挫いてはとの、婆心もあつたので、緩急調節、翌朝、彼と同乘、余は福山まで、彼は、まつしぐらに大阪へと驀進、車中余は何氣なく、豐公の逸話辛抱を說いた覺えがする。然るに青年萬吉君の胸は、混亂動搖したかの樣に見ゆる。福山に近づかむとする時、突如、彼は『若松に還りませう』と、苦悶の聲を發した、其刹那、余は『往け、大阪に當つて碎けよ、他人の說法に、左右せらるゝなと、青年男子の名折れだ、體驗は汝を生かすぞ』と、極めて、冷酷に別れを告げた。果せるかな、彼は週日にして、大阪を背に歸若を急ぎ、途すがら、再び余を訪ひ、『迷夢は霽れました』と朗らかに、智現して、眞見ゆるが如くに歸りしは、もとの丸柏であつた。彼は爾來前垂小僧が、自己の天職であり、眞の偉大さは、此間の消息にありと、頓悟して孜々三昧、今日に至つた宮地萬吉其人であつた。今昔の感、無くてなんとしやう。

濱君は、現店主の舍弟で、性來、强健ならざる强健と見えて生きる力は、頗る

強靱であつた。彼も青年心理の變動期には、免れ難い矛盾と左顧右盻、是非もなし、彼は若松に往いて、仕事は、して見るが、感興は湧かぬ、而して、進む目途も確立せぬ。快々其日を送るに過ぎぬ、消極の過程、痛々しくもあり、可憐でもあつた。余は屢々、彼の姉人に、彼が進路の内相談を受くるので、歸結は『乾坤一擲、彼を鄕に歸へして晴耕雨讀、少青年の過渡期を、大自然に逍遙せしめよ、憂しと見し、若松も戀しかるべき時が、來るであるぞよ』と、決意を促がして、指導したかの樣にも、記憶して居る。果して彼は歸鄕、期年ならざる程に健康は恢復し、生氣は内に滿ちた、而して、彼の外柔内剛の本來面目は、躍如として、彼の決意を堅め、浩歌、若松に躍り入つたが最後、全く、開祖の旗下に滿足し、阿兄の腕となり、萬象を胸に收めて、喜怒色に現はさず、默々其事に從ひ、倦まず、厭かず、適材適所に終始して、今日に至り、實に『無くてはならぬ一人者』の重鎭となつた。當年の濱君が、幸士君と手を携へて、屢々、余を訪れし沈默態度

の、しほらしさ、今、目に映して、やるせなし。

幸士君は、幼少既に文藻の萠芽あり、知は纖微に動いて、讀むもの聽くもの、凡てを吸收する記憶さと、人には、極めて、從順の資質はあつたが、商才、我に適せずと、胸底の悲哀は、四六時中、此少年を苦しめた。而して、學問立身が、前途の光明であり成功であると、妄想止む時無く、健否御構なしに、彼は都に走らむ苦學の夢に、小さき胸を痛めて居つた。而して文の便りには、絶えず、此苦悶を訴へ、時には、走り來つて、余の顏色に、心琴を惱ました者であつたが、余は常に『理想に生きて、不平に奮起、而かも、現實に三昧たれ、道は啓けむ。學の要諦は、此精神に宿る』と、彼の迷衢を遮斷し、妄念を彈壓したかの樣に記憶して居る。而して彼は何時も悄乎としては若松に歸る。其後姿のいぢらしや、少年幸士君の風姿、今髣髴、思ふだに、袖に涙ありだ。歲月蕩々、開祖の溫愛、身に浸みてか、精進三昧の悟道と、時の流れは彼の性的矛盾をも克服せしめて、彼

は、爾來感謝と歡喜に落付き、職卽我の諦觀に、人生行路を見出して、今日に至り、自己の體驗を基調として、次から次へと來る、少年店員に範を垂れ、戰線場裡の先頭に立ち、今や、丸柏の柱石となつた。實に感慨四集の事である。

丸柏鼎足の三人男、各々、其性を異にし、合して一體の用をなす。强さは玆に在る。其一を缺いてはならぬ。萬吉君は仁を主體として、知勇之に伴ふ。爲めに因循姑息と化せず。幸土君は知を主體とするも、仁勇を離れず、爲めに、狡獪の智術に陷らず、濱君の沈勇は、知仁に卽す。爲めに正夫の愛憎なしである、世に所謂三位一體と云ふ事があるならば、丸柏の鼎足は、蓋し其用體で、此三者が長短相補ふ所に、組織を生じ、統制が生れるのであらう。人若し丸柏に宿つて、店員の起居、店員の勤務、さては、店内行事の凡てを、默視し考察したゝならば、其所には、眞面目もあれば、諧謔もある。怠けるが如く、遊ぶが如くに見えて、しかも、仕事はドン〳〵運ぶ。商は捌ける。而して、店には理窟が無い。若し、無

統制の統制が有るとしたならば、此丸柏に於て始めて、見らるゝ事であらう。此店に不景氣なしが、凡てを物語り、凡てを立證して居る。しかも、店員七十餘名卅七、八歳を筆頭に十代廿代の若武者連の集團、其れが、有機全一體の働きと來ては、天下の範としか思へぬ。店の大小など、決して、問題では無い。人心の和で、日々是好日の活躍こそ、店の華であり、人生行路の粹である。而して、考へさせらるゝのは、曰く、學問の中毒と、文化の中毒とである。

最後に余は、開祖御夫婦の御人格を偲びたい。御双方の德望は、丸柏展望中、完璧に近く陳述されてあるから、今更、蛇足の感もあるのだが、余としての觀測も、亦他山の石にもならう。緣あつて、開祖御夫婦は、横濱に來遊あつて、余の宅に、週日宿られた。而して余は朝夕謦咳に接して往古今來の物語を、承つたが歸結は、御双方共、『神か佛の化身か又顯現か』であつた。而して自分の現在が餘りにも、時相に捉はれた生活であり、溷濁の心懷であつたのに、羞恥は愚か、

慚愧其ものであつたのに、悔もし反省もし、しかも、行路の指針さへ、得させて戴いたと云ふ事は、御世辭でも、御上手でも無い、わけても、夫唱婦和の一舉一動には、啻々、感嘆感涙其者で、日本精神の傳統は、斯くやはと、教育者ならぬ教育者に、眞の感化を與へられた事は、實に、一家の啓發であり、至幸であつた開祖、語るらく、『商は儲くるものにあらず、人樣の御便利を圖る、共存機關である』と、而して、開祖は、現代常套文句の共榮共存主義の眞諦を、其儘實現されて居るのに、聊か、讀書した余は、更に啓蒙され、陽明の所謂、知行合一の體を、目の前に、見せ付けられて、余等の机上概念論に一擊、唯、冷汗を覺ゆる者のみであつた。然るに、今や、御双方とも昇天、悲哀と淋しみは茲に在る。だが其御精神と御人格は、長へに、嗣子現店主に傳統され、丸柏の店に澎湃として湛ふて居る。而して、御双方逝かれて、猶ほ、生けるが如しである。

此魂を繼承された、現店主茂君（襲名善藏）は今や默々其上に立ち無爲の有爲

無作の有作で、環境を潤化し、さながら、太陽其ものゝやうで、人を溫め、人を引き付け、求めずして、丸柏の展開が、異圓同中心に、擴大せらるゝは、開祖の遺德は、云ふに及ばず、現店主の人格表現の歸結に外ならぬ。噫、顧みるに、此世は決して、物で無い筈、人間、人間、人間味其者である。今や語つて盡きず、述べては無限、茲に感慨無量に筆を擱く、諒せられよや。

編終餘滴

過る日——

『丸柏の展望』を一先づ脱稿するや、直ちに横濱なる、恩師五十嵐先生の許へ送り、叱正を乞ひ、序文をお願ひした。

公私忙繁の先生に、推して懇請した非禮は幾重にも御詫びしなければならぬ。

然るに、折返し、『快諾』の報を頂いて、本當に嬉しかつた。

五月十四日——

鶴首して待ちたる先生の玉稿が届いた。

『序』の外に、長文の『思ひ出草』一篇が添へられてある。溢るゝ感激に思ひ出の糸を手繰り乍ら、再顧三讀して、載錄させて頂いた。

先生の芳文は、この書の存する限り、珠玉の輝やきを發して、全卷を飾るであ

らう。

吾等は、浴し得たるこの光榮に、勿體なさで一杯である。

只、身に餘る過褒の詞を見出す毎に、汗顔の心地して、穴あらば——の感がする。

『思ひ出の記』は、玉石混同を怖れ、挿入の箇所に迷つたが、決極、內容の命ずるまゝに『丸柏のプロフィール』中に編收させて頂き、永久に餘香を拜することゝした。

聊か先生の御厚志に對し、滿腔の敬謝を捧げて、報恩の道に、いそしむ覺悟である。

惠まれたる、玉稿を配するに當り、編者の衷誠を披瀝して、先生の御芳情に應ふ。

×

表紙、並に巻頭の題字は、現店主の揮毫に成るものであることを附言する。

×

青葉の五月、綠風はゆらぐ——
露にぬれたる若葉の光り、
美しくかゞやきて、床しい薫香を發するとき、すべてのものは甦る。
あゝ、目になつかしき初夏である。吾等は大自然の啓示にひれ伏して、魂の飛躍を誓ひたい。

——二五九五、五、二〇編者記——

〝追補〟

——(昭和十・十一・二〇現在)——

追補

『丸柏の展望』を脱稿したのが去る四月——印刷に廻したのが五月であつた。あれから、もう半歳になる。印刷所の都合で、發行の遲れたことは止むを得ないとして、今、漸く待望の出版を見んとするに際し『丸柏』を繞る幾多の事象に、著しい變化と、推移のめまぐるしさを眺め、餘りにも、テンポの急激に驚かざるを得ない。

卷頭の緒言に述べし如く、全く昨日の『丸柏』は、今日の『丸柏』に非ず、明日の『丸柏』は、又新しい別個の存在であつた。

僅々、半歳の日時が齎した、重要なる移變の二、三を摘擧して追補とする。

×

同志の增加——

本年の四月から十一月現在までに、女店員六名の退店があり、同じく、左の如き十名の入店があつた。

岡田諦子、志方秋子、高橋トシ子、松島君子、山田道江、松尾マサヱ、森美代子、石川智惠子、吉丸晶子、内藤マサ、

かくして、今や總員八十名を越え、陣容整備、昭和十年度、掉尾の活躍に入る、憶ふに、來るべき、昭和十一年の春ともならば、商線の多角化と共に、飛躍的増員の必要を來し、益々多彩の前途が約束されるであらう。

×

宮地正槌君の物故——(通稱、宮村正槌)

盟友、宮地正槌君は死んだ。本當に死んだのだ、悲しい、そして淋しい。けれど、どうする事も出來ぬ現實である。

昭和十年十月三日午前三時——それは、吾等の愛友、正槌君が、再起成らず、

永遠に地上を去つた刻限である。

正槌君は、過る五月の末、靜養の歸省に際して、しみじみと筆者に云つた。

『……丸柏の展望—は、いつ出來るでせうか、出來たらすぐ送つて下さいよ……』

と——

當時悅んで快諾した編者は、何事ぞ、同じペンで弔辭を認め、今、又正槌君追慕の文を書かねばならぬとは——

故人が樂しんで待つた『丸柏の展望』は、日ならず出版される。しかも送るべき當人は、既に一片の墓標と化し去つた。

秋とともに、寂しく逝いた正槌君！

人間に住すること、二十五年、——死するには、惜しき若さであつた。生死不二と聞けど、書けば涙が……泣けて仕方がない。

弔辭にも次の様に書いた、と記憶する。

▽

〃前略〃……身はたとへ、幽明界を異にすと雖、英靈は、必ずや今も尙、なつかしき『丸柏』の上に來りて、吾等と倶に在るを信ず。さあれ追憶纒綿、涙痕衣袖に點じて、故友に寄するの情、又激越たり。

正槌君！　君が在りし日、共に期したる理想の大業は、殘りし同志相携へて、いつの日か、誓つて完成し、故山なる君が墓前に手向けむものを——

正槌君の爲に、思ひ出多き、高塔の峯は、今も、綠濃く變らざるに、あの道を逍歩し、あの樹蔭に、君と語ろうの日は再び無し。

正槌君、吾等、業成るの曉、滿目徒らに蕭條、何れの處にか、當年の君が、面影を偲ばむや。……〃後略〃

▽

切々の友情は凝つて涙滴と化し、悼惜の詞は縷々として盡きぬ。全く正槌君の永眠は、店にとつて、痛恨の極みであり、一大損失であつた。

『丸柏の展望』は、如上の意味に於て、宮地正槌君が靈前への手向草ともなつた。

『……皆様に感謝致します……それではこれから……私、店へ歸ります……』

これが店に生き、店を懷ひつゝ、故郷の生家に、逝いた正槌君の臨終に於ける一語である。

貴い事實として、吾等は、故人の素志を、生かしたい。

×

擴張用地の買收完了——

幾度かの頓挫と、難交渉とを經て、『丸柏』の明日に備ふべき擴張用地の買收が漸く完了した。

現店舗に隣接せる、中川通側十五間本町側十間の地面百五十坪、及建込の家屋全部を含めて、元の所有者、眞鍋氏より、完全に譲渡を得たのである。

それは去る十月二十二日であつた。

而して、創業祭の初日たりし十月二十八日——眞鍋氏の退居と共に、當分、柏進寮員の寄宿舎に當てることゝした。

かくして、丸柏の店舗總地面三百餘坪——一大擴張への外面的、第一工作は既に成つた。祝福すべき慶事であり、店史上、劃期に値する事がらである。

若松市隨一の目貫街を一手に領有し、やがて、聳立するであらう處の、膨脹丸柏が新館の偉容を想像し、今から胸の躍る心地がする。

吾等の『丸柏』は目に見えぬ偉大なる力の哺育をうけて、かくの如く成長し、不斷の伸展を招來した。

過分の幸惠に浴するもの——超度の酬恩を捧げざるべからず、今や、外的飛躍

を目前に控え、それに伴ふべき全員の內面的準備や如何に——

×

丸柏の展望出版——

一つの使命を帶びて、昭和十年の霜月、この書が遂に誕生した。荒削りなれど『丸柏』の全生命を宿して、脈々の鼓動を、讀む人々に與へ得れば幸甚である。

本書に依りて『丸柏』創建の片影を探り、紙背に盛られたる、眞の『丸柏精神』を味獲し得る人々こそ俱に相許す同志である。

漸く第二期に入らむとする丸柏のゆくてを示す、指標として、この書は又重大の意義を持つ——

されば『丸柏の展望』を通じて、店祖並に初代店母が、躬を以て刻みたる、至誠塔を仰ぐもの——心して、脚下に湧き出づる、不滅の聖泉を掬み得んか、筆者の光榮と感謝、何ものか、これに過ぎむ……

×

待ちわびし『丸柏の展望』は、花の春、稿を托し、青葉の夏を無爲に、錦の秋を迎ふるも成らず、やがて、落葉に霜寒き今日——漸やくにして出でんとす。

四方の山々にさへ、既に三度の更衣があつた。水は小やみもなく流れ、雲は涯てしなく彩りを代へる。

あゝ、大自然に抱かるゝもの、——すべては大いなるさだめにつれて、生成しつゝ、一路創造への爆進である。大調和への參與である。

この追補の記も、さうした、半歳推移の所産に外ならない。

×

野を往けば、サラ〳〵と、枯葉降る詩境もあらむ、巷に立てば、カラコロと、軒端賑あふ、ざわめきもあるべし。

さるに、忙中の數刻を、玆に避けて、斷片的追補の稿を終る——

——（昭和十・十一・二〇）——

於丸柏別館三階 ● 編者識

昭和十一年三月三日印刷
昭和十一年三月十日發行

非賣品

發行所　福岡縣若松市中川通五九八番地
合名會社柏原吳服店內
柏苑會

編輯兼發行者　福岡縣若松市中川通五九八番地
村上幸士

印刷者　福岡縣小倉市田町三三八番地
豊田勝

印刷所　福岡縣小倉市金田町一丁目
合名會社オトバ印刷所
電話八〇二番

不許複製

終